



ゆき
雪

著者の了
解により
検印廃止

© 丹羽文雄 一九六一

昭和三十六年四月十日 第一刷発行

三三〇円

著者 丹羽文雄

発行者 野間省一

印刷所 豊国印刷株式会社

(藤沢製本)

発行所

株式会社

講談社

東京都文京区音羽町三ノ一九

振替 東京 三九三〇
電話大塚(九四二)大代表三二二一

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

目次

雪		五
航跡		七
浮木		一三
交叉点		一九
もぐらの宿		一七
再婚		三九

装帧
関野
準
一
郎

雪

雪

澄んだ大気のなかで、焰がもえあがった。熱も風もともなわず、焰はもえた。原の低い方はしを中心にして、弧をえがき、二キロにわたるにしきの幔幕である。音もたてず、焰はもえつづけた。空が、赤く染まった。絢爛、鮮烈な色彩は、山火事に似ていた。紅蓮の焰は濃緑のときわぎを一気になめつくす勢である。全山が焰の地獄と化すのは、またたくあいだである。規模の雄大もさることながら、高山特有の色彩の玄妙であらうか。標高九百米だった。この原に足をふみいれたひとは、雄大な紅葉のながめに息をのむ。呼吸までが焰の色に染まった。が、惜しいことには、その期間があまりにみじかすぎた。三日間が見ごろであり、一夜の霜で、翌日は色あせて、黒ずみ汚れて、昨日を知っているものに凋落のはかなさを教えた。

紅葉は山から谷間へ、そして山麓に移行した。そのあとから冬がかけ足でやってきた。例年温泉場の紅葉客がたえると、湯治客も激減して、まもなく初雪がふる。しかしその雪は、いったん消える。しばらく晴天がつづき、つぎにふるのが根雪となった。大てい、十一月中旬である。

十月のある日、会計係の島が名簿をくつていると、四号館に長逗留の客がひとりいることに気がついた。由来、この温泉は泉質がつよいところから、三日をひとまわりとして、三まわり十日をひと湯治と昔からいわれている。湯治期間のみじかいことが、温泉の浴効のすぐれていることを裏書する。内部疾患の治療にはそれほどのききめはないのだが、皮膚病や神経痛には、効能がはっきり目にみえた。来湯の当初の目をおおうような全身の皮膚病が、きれいになおった。廊下つづきの浴場へ、ひとの肩にすがったり、松葉杖をつかっていた神経痛が、一日とよくなり、つき添いも杖もいらなくなり、しまいには附近の名所を見物に出歩くようになる。中には、うれしさのあまり、裏手にそびえるK岳に登山するものもあった。かえるときには不要になった杖を、浴場裏手の薬師の小祠に奉納する。毎年秋、祠の前で杖の束を焼いて供養した。温泉場の年中行事のひとつである。周囲を山にとりかこまれ、主峯K岳の山ふところに抱かれた湯宿だった。敷地がせまく、旅館部、自炊部の大小十いく棟と、大浴場がひしめいている。各建物は渡廊下でつながっていて、温泉場全体がひとつの経営であった。二百年の歴史をもつといわれた。旅館では十日目ごとに勘定をするのが、しきたりであった。よほど頑固な神経痛以外には、めったに長逗留する客はなかった。近年観光客がつかけるようになったが、行楽地というわけにはいかない。あくまで湯治が目的である。神経質な島は、事務室の主任の川口老に声をかけた。

「四号館十号室の蒔田さんという、まだ若いお客さんから、お金をあずかっていますか」

和服に前かけすがたの、いかにもこの温泉場にふさわしい老人が答えた。

「蒔田さん？ まだ若い……？ ああ、そうか、あのお客さんか。いや、帳場では何もあずかってないよ」

「あずかり金がないとすれば、一応勘定していただく必要があります」

「うん、それは島さんの役目だ」

湯治客は入浴することが毎日の仕事であれば、貴重品はかならず帳場にあずけ、事故のないようにと番頭が最初に申上げることになっている。ことに自炊部の一室で雑居する客には、とくにその必要があった。客は部屋がきまると、事務室にきて、貴重品をあずけた。家族づれの客のなかには、交代で入浴するので、あずけないひともあるが、湯治中は売店もあり、金がなくとも不便はなかった。島は係りの番頭に、四号館十号室の蒔田に事務室まできてもらうようにいつけた。まもなく、二十二、三歳の蒔田がはいってきた。その椅子に招じた。一米六十はあるだろう、痩せていて、色があさ黒く、大きな目をしていた。ひきしまった口もと、長髪には油気がなく、男らしい顔立である。何か陰鬱な感じがあった。湯治客に血色のよいのはもとめられないが、十日以上も滞在していながら、憂鬱な感じが払拭できないのは、よほどふかい部分が病んでいるにちがいなかった。島は名簿の中で自分のよく知っているM市の町名をよみながら、

「蒔田さんでしたね。およびして申訳ありませんが、さきほど番頭から申上げたとおり、当温

泉の規定で、十日目に一度お勘定をいただくことになっていきますので、そのあとごゆっくりとご滞在ねがうことにして」

「じつは、父がすぐあとからくるというので、金を用意してこなかったのです。父は急用ができて、すぐこられなかったのですが、明日の昼のバスでくるというしらせがありました。勘定は明日にして下さい」

明日というのが、うますぎるような気が島はした。三日あとというのなら、あるいは信じたかも知れない。

「お宅のご商売は何ですか」

「電気器具商です」

「じゃ、あの電気屋の蒔田さんでしたか」と、島は偶然におどろいた。「私は以前お宅のすじ向かいの東陶商会に二年つとめていたので、お宅のことはよく存じ上げているんですよ。そうすると、あなたは蒔田さんのご長男でしたか」

この偶然が、蒔田にも衝撃をあたらえたようである。大きな目が落着きをうしなった。がすぐ、「そうです」とひくく答えた。下を向いて、長髪をかきあげた。その目は二度と島の顔が正視できないようであった。

「それでは明日、お勘定をいただくことにして、どうぞ、おひきとり下さい。失礼しました」
頭を下げて、事務室をでていく蒔田を見おくっている島の顔から微笑が消えた。自分の視線

に射すくめられて歩きにくくなった蒔田の気持が、島によくわかった。蒔田の急所をついたのは、たしかであった。数年前、島がM市の東陶商会につとめていたのは事実だが、蒔田電気店の家族のことまでくわしく知らなかった。

「どうも嘘らしい」

と、島は川口老人にいった。

「そうかね」

ひとをうたがうことを好まない老人は、このことに初めから大して関心をもっていないのだ。島は苦笑した。二十年勤続の川口老人には、よくあることで、日常茶飯事だろう。島は、係りの番頭と女中に、蒔田に注意をするようにいつけた。ある大きな温泉旅館では、まるくて小さい赤札と青札が用意されていて、客室の入口にはりだされた。赤は片時も目がはなせられない危険な客であり、青はそれほどでなくとも、一応は注意の必要な客というしるしであった。情死でもされたら大へんである。無銭飲食防止でもあった。帳場と女中だけが丸札のいわれを知っていた。ここでは、それほどのことはいらないのだ。翌日、昼めしをとどけに女中がいくと、蒔田がいなかった。

「散歩に出かけたようだ」

と同室のものがいった。

「いつごろでしたか」

「そうだ、十時が過ぎていたかしら」

蒔田はそれきり戻らなかった。むしろ、蒔田の父というのもあらわれなかった。M市に出たひとにたのんで、島は蒔田電気店にといあわせた。

「背恰好から、年齢、風貌から考えると、それはうちの長男の同級生の長谷三吾に似ている」
長谷の住所をきいて、訪ねると、この春東京に出て、不在ということであった。

「島さんの黒星だね」

と、川口老人が笑った。島は、赤箋に書きこんだ。

『四号館十号室、M市汐入町二番地、蒔田豊二十三歳、九月二十日到着、飯（飯だけ供給している意味である）、蒲団一組、丹前並一枚、十月五日、無断外出、行方不明。調査の結果、蒔田豊は偽名で、蒔田主人の言によれば、人相風態から、蒔田の長男の同級生たりし長谷三吾、二十三歳ならんか』

未収の大きなスタンプを捺して、宿泊人名簿に貼りつけた。それに似た事件もあり、事務所ではわすれるともなく蒔田のことをわすれた。

毎年、温泉場は十一月十五日で閉鎖となった。切りあげ準備にいそがしく、山にのこる越年組は来年三月一日の山開きまで雪とたたかう支度をしなければならなかった。越年組を、温泉

場冬季閉鎖中の保安要員といった。越年組には、外ばたらきの若者と、番頭があらかじめ希望者をつのり、秋にはいるころにはその中から三人が決定した。今年は、工藤留次郎を頭に、杉田元作と、鹿内惣太がのこることになった。工藤は留さんとよばれ、温泉に勤続十六年、四十三歳である。色が黒く、中肉中背の目だたない男だが、永年の経験から温泉場の外仕事にもくわしく、外ばたらきの若者頭として信頼されていた。かれの女房は自炊部の炊事婦として、子供ふたりと従業員部屋の一室にすんでいた。越年の仕事にも、すでに十回のペテランである。

外ばたらきの若者には、留さんをふくめて五名いた。正式の職名は役夫といい、敷地や道路修理などの土方仕事から、春は筍とりや、秋はきのこ取り、その他温泉名物の山菜料理の材料を採集し、塩蔵する仕事もあった。また営業用の薪材にはらいさげた雑木の杣夫もやれば、薪わりもする屋外雑役に従事する人夫のことである。毎年営林省からはらいさげられる営業用の薪材は、その秋に伐採し、薪棚につんで乾燥させ、翌年になってはこぶのである。この温泉場の附近には、竹やぶが多かった。島がある大学の高山植物実験所の先生からきいたところによると、植物の水平的分布といい、ここ一帯の連山の植物は、いずれもおなじ高度のところに同種のものが生えているという。どの山にのぼっても、そこに生えている植物をみれば、その高さがあった。連山をながめやるとき、それぞれの植物の色彩が水平にいろどられていることがわかる。それによると、海拔九百米のこの附近には、おなじ竹が生えた。根曲り竹と呼ばれる二、三米高さの細いものである。その根でつくったパイプは、郷土の特産として売りだされ

た。その筍は細いが、美味であり、旅館の調理部では欠かすことのできない山菜料理の材料であった。季節にはいると、役夫が総動員で採取し、ゆでて塩蔵する。季節外にも調理して食膳をかざることができた。自炊部の湯治客もすぐ裏手の竹やぶにいき、三十分もするとひと抱えも採ってくる。これをわかめといっしょに味噌汁にすると、格別の風味である。筍は温泉場の春の味覚であり、名物でもあった。ことに今年は塩蔵から一步すすめ、罐詰にする計画であり、すでにボイラーも据えつけ、その成果が期待された。

「おれはひとりものだから、いつまで雪の中にとじこめられていたって、痛くもかゆくもないんだが、留さんや杉田さんは女房持ちだ。来年三月まで、さぞおつらいことだろうと、心から同情申しあげるよ」と、からかう惣太は、二十二歳だった。留さんとおなじく、地元の村の出身である。背は低いが、筋肉がひきしまっていて、機敏で、仕事をよくやった。

「わしは今年で二度目だが、惣太に同情されるほど辛いこともないとわかったよ。雪ごもりをすれば、それだけの役得がある」

大男だが、杉田はからだに似合わずおとなしく、女のような声をだした。容貌魁偉と形容してもよいのだが、ひとあたりはやさしかった。杉田は、越後の生れだった。多少読み書きができるので、自炊部の番頭をつとめるようになり、この温泉場で三年目である。昨年自炊部の女中と結婚したが、子供はなかった。一室があたえられていて、夫婦仲のよいので評判である。

「惣太にはけんか相手がいないから、お気の毒みたいだな」